

下丸子まちづくりマガジン

Meet-Up Shimomaruko

[CONTENTS]

まちのキーパーソンに聞く

わたしと下丸子

気鋭の5人による取り組み紹介とクロストーク

下丸子まちづくり座談会

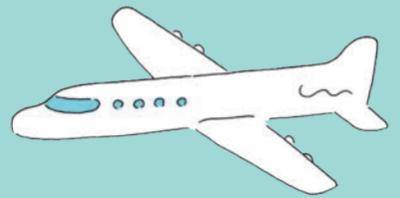
下丸子のあゆみを振り返る

まちづくりの"これまで"と"これから"

2040年に向けたまちづくりが進行中！

『下丸子駅周辺地区まちづくり構想』とは？

みんな
で考える、
このまちの
未来のこと。



下丸子まちづくりマガジン

Meet-Up
Shimomaruko

まちのキーパーソンに聞く

わたし と 下丸子

下丸子でさまざまな活動を行う5名のキーパーソンに、その取り組みの内容やまちへの思いをインタビュー。学校の運営やレストランの経営、イベントの企画などなど、さまざまなまちとの関わり方から、下丸子の魅力と可能性を探ります！



下丸子DATA

東京都大田区の西側に位置する下丸子は、東急多摩川線が走り、駅周辺には約2万人が暮らしている。戦後は日本を代表する大企業の工場が軒を連ね、ものづくりのまちとして発展。現在でも中小規模の町工場が数多く立ち並ぶほか、多摩川が流れる豊かな自然環境も魅力のひとつ。

スポーツを通じた
“ひとづくり”

目の前の生徒に向き合いながら
その先にあるまちを変えていく

「子どもたちが生き活きとサッカーをできる環境をつくりたい」との思いから、2012年に当団体の代表がサッカースクールを立ち上げ、今ではチアダンスやヨガ、かけっこに、英語で指導を行う運動教室など、6つのスクールを運営するまでになりました。会員が増えていく中で、私たちの存在意義を改めて考えてみると、それは“人を介して間接的にまちをつくる”ということだと気づいたんです。そこからは「ひとづくり、まちづくり」をコンセプトに、目の前の生徒はもちろん、その先の地域も意識しながら活動しています。より良い環境をつくるための手段はスポーツという枠組みだけにとどまりません。今後は芸術・文化的な分野も視野に入れながら、地域と向き合っていきたいですね。



佐藤 秀樹

Key
Person
01

ベアーズ

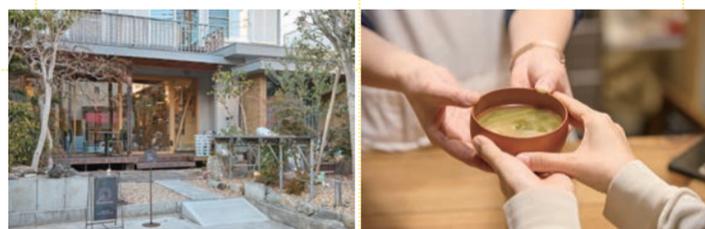
総合型地域スポーツクラブ「NPO法人ベアーズ」の事務局長。各種スクールや教室の運営・指導を行う。「シン下丸子プロジェクト」実行委員会立ち上げメンバー。



食を通じたつながりで感じる
下丸子の人々のぬくもり

「CHAINON lien」という屋号は、フランス語で「幸せの連鎖」と「ご縁・絆」というふたつの言葉を掛け合わせたもの。そんな名前を付けたのは、私自身、人のご縁で今があると感じているからなんです。「hatome」（P.6参照）への出店も、料理人を目指して飲食店を転々としていたときに知人に紹介されたことがきっかけだし、その後たくさんのお客さんとお関わったことで、下丸子の人の温かさを日々感じています。私にとって料理とは、人に喜んでもらうための手段。「おいしかったよ」と言ってもらえたら、力をもらえるし、やりがいにもつながる。地域の人たちの暮らしの一部になれるように、これからも食を通じた幸せの連鎖をどんどん広げていきたいと思っています。

幸せの連鎖と
ご縁が生まれる店



馬場 翔子

Key
Person
02

シェノンリアン

地元・滋賀のレストランで修行後、2017年に上京。雑誌やテレビ番組のメニュー監修などに携わったあと、2022年から「hatome」に出店し、ランチボックスや惣菜、スイーツなどを提供する。

つくってないけど、
つくってます！



山本章子

Key Person
03

くりらぼ多摩川運営委員会
(おたクリエイティブタウンセンター)

「くりらぼ多摩川」工場長。体験教室等を行う
くりらぼ多摩川の管理・運営やおたオープン
ファクトリー (P.6参照) の企画・運営を行う。

地域のモノと人を循環させて
ものづくりの文化を後押し

2013年にオープンした「くりらぼ多摩川」では、「SCRAP (工場廃材)」の量り売りや、日替わりで運営を行う「くりらぼメイト」による自由工作教室、工場見学ツアーなどの活動を行っています。ここでは、ものづくりを通して何かにチャレンジしたい人が集まる拠点。工場長として、人と人、モノと人をつなげ、さまざまな人が楽しめる場をつくっているんです。廃材の提供や工場見学にも快く協力してくれるのも、お互いの存在をリスペクトし、みんなでひとつのものをつくりあげる「仲間まわし」の文化が根づいているからこそ。まさに、職人さんの心意気。この場所で多様な世代や職業の人が交わり、挑戦を応援し合い、ものづくりの文化が広がってほしいですね。



まちに若い息吹を吹き込み
新しい景観をつくる

下丸子の古き良き風景を守りながらまちを活性化させていくためには、若い世代が参加できる場が必要だと思い、2023年に立ち上げたのが「シン下丸子プロジェクト」です。商店街を開放し、チョークで道路にペインティングをしたり、キャンドルを灯したり、これまでに2回のイベントを開催しました。モットーは「とりあえずやってみる」。最初は右も左もわからない手探り状態でしたが、いろいろな人たちの意見を聞きながら形にしてきました。受け入れてもらったのも、不動産屋として日頃から地域と関係性を築いてきたからこそ。これからも若者からお年寄りまで多様な世代が参加できる、新しい日常風景をつくっていききたいですね。



地域を巻き込む、
「シン下丸子プロジェクト」



原 塔 貴

Key Person
04

ミノラスパートナーズ

不動産会社「ミノラスパートナーズ」を営みながら、「シン下丸子プロジェクト」実行委員会を立ち上げ、イベントの企画・運営を行う。下丸子商店会理事・下丸子3丁目町会理事。

みんながやりたいことをやって
生まれる“下丸子らしさ”

私は「街ブラ」をよくするのですが、やっぱり歩いていて楽しいのは、「盛り場」があるまち。住宅街の中に昔ながらの個人店が点在する下丸子にも、同じような匂いを感じています。「カフェズー」は、そんな下丸子の風景を少しでも彩れたらと思って始めたお店で、昔から好きだった図鑑を中心にした本屋と併設のカフェ、2階はオフィス兼住宅というスタイル。気負わず、自分が楽しいと思える活動が少しずつ増えていけば、まちは変わっていくと思うんです。たとえば、日常的に屋台が出ていたりイベントが開催されていたりすると、面白いですよね。地域のお店や活動を知るきっかけにもなるし、つながりも生まれる。そんなチャンスがあれば、私もぜひ協力したいと思っています。



鎌田成徳

Key Person
05

カフェズー

「ZU WORKS」代表。テレビ局での勤務を経て、2022年に地元・下丸子で「CAFÉ ZU」をオープン。店内には図鑑を中心に1,000冊以上の書籍が並ぶ。現在「CAFÉ ZU」は不定期で営業。

“図鑑カフェ”で
歩いて楽しいまちづくり

気鋭の5人による取り組み紹介とクロストーク！

下丸子まちづくり座談会

2023年12月に大田区立矢口西小学校で開催された「下丸子まちづくり座談会」。地域内外で活躍する5名をゲストに、それぞれが取り組むまちづくり事例をご紹介します！ その後はゲスト同士のクロストークも。注目の事例に学ぶ、下丸子の「これから」とは？

おおたクリエイティブ
タウンセンター
野原卓さん

hatome
金井絵美さん

散歩社
小野裕之さん

マイアマイア
アリソン理恵さん

O+Architecture
鈴木美央さん

moderator

初山真人さん
東京工業大学社会工学科卒業、同大学院修了。東京女子大学特任教授。株式会社リライト代表。2016年グッドデザイン賞ベスト100、特別賞受賞。



“とりあえずやってみる”が次のきっかけを生む

初山 皆さんの取り組みを聞いて「担い手の発掘・育成」がキーワードのひとつだと思いました。住民に関わってもらおううえで、大事にしていることはありますか？

鈴木 「無理をしない」ことですね。まちに関わりたくいけど、生活に負担が掛かるとつらくなってしまふ。シンサヤママーケットは、複数人で回すことで、忙しい時期はほかの人に運営をお願いできるような体制にしています。

アリ 病気や、子どもが熱を出すとか、いつ何が起こるかかわからないですもんね。

鈴木 だからマーケットの出店者さんにも「当日のドタキャンもOK」って伝えていきます。続けるためには、楽しいって思えるような体制をつくるのが大事。

アリ たえば、町内会やPTAって敬遠されがちですね。でも、メンバーが入れ替わり自由だったら参加したい人も増えるんじゃないかなって思うんです。それは、次の担い手を育てるということにもつながると思います。

初山 そういう意味では、「hatome」は挑戦したい人の入り口になっていると思うのですが、何か工夫していることってありますか？

金井 始めるためのリスクをなるべく下げることでですね。作品やお菓子の委託販売は出店料が掛からず、売上に対する歩合制ですし、告知は店舗のSNSでも行うので、ゼロからお





「マーケット」で生み出す、地域の居場所

埼玉県狭山市にある商店街では、空き店舗の増加を背景に、2020年からシンサヤママーケットを開催している。立ち上げから携わる鈴木美央さんは、これからの商店街の形を自治体や地域住民と一緒に模索してきた。「高齢化・人口減少する中、ただ空き店舗を埋めるのは無責任」という鈴木さんが目指したのは、住民に愛されるコミュニティの場にあること。「知らない人に声を掛けたり、子どもを皆で見守ったり、あらゆる活動が生まれるまちこそ豊かな空間。マーケットは、地域の人たちがつく

りあげていくことで愛着が湧いてくるんです」
運営は「なるべくお金を掛けない」をテーマに、出店料だけで回る仕組みに。また自走化を視野に入れ、任意団体も設立した。現在では自身が暮らす志木市でも同様に、「柳瀬川マーケット」を開催している。「大きな覚悟やリスクを持たずに関わりたいと思う人が増えることが、これからのまちづくりの方向のひとつ。関わる人が増えれば、まちは面白くなるし、やがてそこに暮らす人々の居場所になっていくと思うんです」



鈴木美央
(O+Architecture)

O+Architecture 合同会社 主宰。建築設計、行政のアドバイザー、マーケットの企画・運営、公共空間の研究などを行う。著書に「マーケットでまちを変える」(学芸出版社)。

BONUS TRACK (ボーナストラック) 東京都世田谷区



面白がって使いこなせば、「らしさ」が育つ

小田急線の東北沢～世田谷代田駅間の線路跡地に、2020年に開業したボーナストラック。店舗・住宅一体型の4棟と商業棟で構成される同施設は、発酵食品の専門店やレコードショップ、本屋など個性的な15のテナントが入居する「長屋スタイル」の商業施設だ。「賃料が高いとチェーン店しか借りられずに、そのまちらしさが失われてしまう」と考えた小野裕之さんは、デベロッパーであり土地を所有する小田急電鉄と条件をすり合わせながら、個人がチャレンジしやすい環境づ

くりを目指してきた。ほかに、小伝馬町では8坪4階建てのビルをリノベーションし、本屋やイベントスペース、レジデンスなどが集まる(※開業当時)「ANDON」の運営、さらに2022年に閉館した「世田谷ものづくり学校」の跡地活用事業にも携わるなど、さまざまなプロジェクトを手掛けている。「とにかく面白がりながら、自由に使える場所を増やしていきたい。まちに眠っている空間を大人が使いこなす。それがそのまちらしさを育て、次の世代にも循環していくんだと思います」



小野裕之
(散歩社)

散歩社代表。NPO法人グリーンズを経て、小伝馬町でビル再生を手掛ける。2020年下北沢に現代版商店街「BONUS TRACK」を開業。2021年グッドデザイン賞ベスト100受賞。

MIA MIA (マイアマイア) 東京都練馬区

コミュニケーションを誘発する場づくり

「まちとは市民が生きる場所で、市民がつくっていく場所だと思うんです」
池袋から2駅の東長崎駅で、カフェ・マイアマイアを営むアリソン理恵さん。ここを拠点にさまざまな活動を行う彼女が心掛けていたのはふたつある。ひとつは「挨拶をすること」。お客さん同士で会話がしやすいようひとつの大きなテーブルを店の真ん中に、また、通りすがりの人にも声を掛けられるようスタッフはあえて窓側に配置。「ひとりですることは限られているので、プロジェクトを生むた

めには、人と人が関われる機会をつくるのが大切なんです」
もうひとつは、「やりたいことができるインフラをつくること」。「ふだんサービスとして受け取っていることを自分たちの手でイベントにすると、関わる人は増えていく」と考え、店舗をラジオ体操や結婚式の場所として貸し出すこともあるという。関わりやすい「余白」をつくることでプロジェクトが生まれ、市民同士のつながりが循環していく。それが日常の風景として定着することで、まちは豊かになっていくのだろう。



アリソン理恵
(マイアマイア)

一級建築士事務所 ara 主宰。2020年から東長崎で、MIA MIA (2023年グッドデザイン賞ベスト100受賞)、ギャラリー・キオスク1AMを営む。



撮影：Yurika Kono



「世田谷ものづくり学校」でも創業支援をしていただのですが、卒

小野 同感です。散歩社で現在リニューアルを進めている「世田谷ものづくり学校」でも創業支援をしていただのですが、卒

初山 せっかく「hatome」で挑戦して力を付けた人たちがまちを出ていくことや、次の拠点として別の土地を選ぶこともあると思うのですが。
金井 もちろん下丸子に残ってくれたらうれしいけど、まずはその人の選択を尊重します。自分が望んでいる土地のほうに愛を持てるだろうし、それはお客さんにも伝わるはず。だから、むしろ別の場所を紹介することもあります。
アリ すばらしい！
金井 もし親身に自分のことを考えてくれる人がいたら、そのまちを離れたとしても、その人との関係は続いていくと思いますね。

「地元」だけじゃない 第二の故郷との関わり

野原 とりあえず始めることで、新たな広がりが見えてくることってありますよね。おたおたオープンファクトリーは、今でこそ子どもの参加者も多いですが、始めた当初は、どちらかといえばものづくりに関心のある大人向けでした。
小野 そうだったんですね！
野原 でも続けていくうちに「もっと多くの人に現場を見てほしい」という次のやりたいことが見えてきて、今の形になったんです。
金井 挑戦することで新しい出会いも生まれますし、周りからの反応がもらえるので、次のステップにも生かせると思うんです。



ひとつのお店が街中をつないでいく

カフェやシェアキッチン、コワーキングプレイスにアートギャラリー、レンタルスペース、ショップ……。築約50年の古民家を改装し、2022年に下丸子にオープンした「hatome」は、さまざまなコンテンツが共存する複合施設だ。「地域の人の居場所になりたい」というオーナーの思いを受け、金井絵美さんが所属するボンボヤージュが店舗全体の運営を行っている。

地域内外の作家がハンドメイドのアクセサリや小物を委託販売したり、壁を展示スペースとして低価格で貸し出したり、気軽に「小商い」に挑戦できる仕組みを備えているのも特徴だ。「ゼロから自分のお店をつくるのは大変だけど、『hatome』だけ

ら始められたという、出店者の声も多いですね」

曜日ごとにシェフが変わるランチも人気で、いつ誰が担当するかをSNSで毎月発信、シェフの思いや出店したきっかけを紹介する動画も公開している。「飲食を入口に、つながりを増やし、まちの人とともにお店をつくっていききたい」

最終的にはボンボヤージュは運営から離れ、自走化する形を目指しており、市民が今後も関わり続けられる仕組みづくりを心掛けている。

「私は地域の人に育ててもらったので、今度は自分がまちに貢献したい。『hatome』とまちをつなげて、愛される場所にしていききたいですね」



金井絵美 (hatome)

大手カフェチェーン店でバリスタや店舗マネジメントを経験後、ボンボヤージュのスタッフとして2022年からhatomeに携わる。2023年からは店長(コミュニティー・ファンリレーター)を務める。



地域の価値を発掘し、育てていく

2017年、「モノづくり」をベースにしたまちづくりを目指して設立された「一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター(以下、OCTC)」。2009年から大田区のまちづくりに関わり、同組織のセンター長を務める野原卓さんは、大学で教鞭を執る傍ら、関内の路上を活用したイベントや、伊豆長岡温泉のフリーマーケットなど、数多くのプロジェクトに関わっている。「仲間まわし」の文化を持つ大田区には、独自のものづくりの精神が根付いているんです」

その一方で、近年では騒音などの問題によって、シャッターを閉めて作業する工場が増加し、住民との間に距離が生まれている、と野原さんは話す。そう

した思いから生まれたのが、年に1度、町工場を公開し見学できる「おおたオープンファクトリー」だ。2012年にスタートし、13回目を迎えた昨年は約30社の工場が参加、ねじまき隊と呼ばれるボランティアスタッフは数十名を数え、まちの一大イベントとなっている。

OCTCが運営を行う「くりらぼ摩川(P.3参照)」では、職人とお酒を飲みながら話ができる「町工BAR」や、専門学生と工場がコラボしたカプセルトイの販売も人気だ。

「地域の魅力を浮かび上がらせる活動が同時多発的に起こると面白いまちとして認知される。すると地域間の交流が生まれ、盛り上がっていくと思うんです」



野原卓 (おおたクリエイティブタウンセンター)

一般社団法人おおたクリエイティブタウンセンター センター長。横浜国立大学大学院准教授。全国各地で都市デザインを実践、都市デザインマネジメントの研究・実践活動も行う。



業者が区内に定着するのはなかなか難しかったそうです。そのまちに定着してもらうには、政策支援などの後押しが必要。あるいは、ポーンストラックのように地元の不動産オーナーと協力して、賃料を下げる工夫をするとか。

初山 アリソンさんが東長崎に着目したきっかけは何だったんですか？

アリ 東長崎は個人店が並ぶ昔ながらの商店街があったり、手塚治虫さんが若手時代に暮らしたトキワ荘があったり、古き良きまちなんです。訪れたときに、そんなまちの雰囲気、オーストラリア人の夫と「エキゾチック！」ってめっちゃ盛り上がった(笑)。

野原 いいですね。下丸子がある大田区も商店街や町工場に住宅街、さらに羽田空港まで揃っていて、こんなに豊かなまちはなかなかないと思うんです。

初山 住人や通勤者もいるので、まちに関わる人も多いですね。

金井 人手不足で定休日が多かったり、宣伝がうまくされていなかったりするけど、魅力的な個人店も多いです。

野原 私は学生と一緒に活動もしているのですが、メンバーは毎年必ず入れ替わるのですが、今でもわざわざ手伝いに来られるOBやOGもいます。何かに残るものがあれば、第二の故郷となり、人とまちの関係性は続いていく。そういう人たちを増やしていくことで、まちの新たな代謝はさらに上がっていくと思います。



まちづくりの“これまで”と“これから”

大田区は2021年に「下丸子駅周辺地区まちづくり構想(案)」を策定し、
現在は「(仮称)下丸子駅周辺地区グランドデザイン」の策定に向けて進行中。
ここではこれまでのまちづくりのあゆみを時系列でご紹介。今後も取り組みは続いていきます！

2021

2021年3月

「下丸子駅周辺地区まちづくり構想(案)」策定

下丸子駅周辺地区の20年後の将来像と、その実現に向けたまちの在り方を示すため、「下丸子駅周辺地区まちづくり構想」の素案をまとめました。

はじまりは
ここから！

2021年10月～

下丸子駅周辺地区の まちの将来を考える会(勉強会)

2021年10月から2023年3月にかけて計8回の勉強会を実施。商店街や自治会・町会、工和会協同組合、おたクリクリエイティブタウンセンター、下丸子に立地する民間企業などの地区関係者をメンバーに、地域の資源や課題、駅周辺や地区全体の将来の姿について意見交換を行いました。

地域が主体
となって定期的
に開催！

2022

2023年1月

区民説明会

2023年1月13日(金)・14日(土)の2日間にわたり大田区民プラザで区民説明会を開催しました。構想の策定から概要について動画で説明を行ったあとは、参加者による質疑応答を実施。オープンハウス型説明会と合わせて、58名の方が参加しました。

2023年1月

オープンハウス型説明会

2023年1月14日(土)に行われた区民説明会の会場では、オープンハウス型説明会も開催。今後のまちづくりの方針や概要をまとめた説明パネル等を展示し、参加者の質問等に対して担当者が説明を行いました。

2023年1～2月

パブリックコメントを募集

「下丸子駅周辺地区まちづくり構想(案)」について区民の意見を募集するため、2023年1月13日(金)～2月2日(木)の期間、パブリックコメントを募集。計画や交通状況、住民の参加などの項目に対して、42名から102件の意見が寄せられました。挙げられた意見とそれに対する区の回答は、大田区ホームページ「大田区:『下丸子駅周辺地区まちづくり構想(素案)』に対するパブリックコメントの実施結果について」で公開しています。

区民の意見を
集めました

【パブリックコメントの例】

- 下丸子らしさ、多摩川線沿線らしさを大切にほしい
- 20年後までにまちづくりはほんとうに完了するの？
- ガス橋通りの踏切(下丸子2号踏切)は交通量も多く解消したほうが良い
- 企業と住民のつながりができる施設があってもいいのでは？
- オンラインの活用など、多様な世代が参加しやすい機会を

2023年3月

「下丸子駅周辺地区 まちづくり構想」策定

下丸子駅周辺地区の2040年頃の将来像とその実現に向けたまちづくりの方針をとりまとめた「下丸子駅周辺地区まちづくり構想」を策定しました。地区関係者と共有し、今後まちづくりを推進していくための指針となります(P.8参照)。

まちづくり
の指針を大田区
HPで公開中！

2024年2月～

下丸子駅周辺地区グランドデザイン策定 に向けたまちづくり検討会

2024年2月17日(土)に第1回「下丸子駅周辺地区グランドデザイン策定に向けたまちづくり検討会(以下、検討会)」を矢口特別出張所大会議室で行いました。まちづくり構想で掲げる下丸子駅周辺地区のまちづくりコンセプトの実現に向け、行政と地域の関係者が連携し、より具体的な取り組みを示すため、地区関係者や公募により参加した区民の方などに検討会の趣旨や役割、進め方などについてレクチャーを実施。さらに、ワークショップ形式のグループディスカッションで意見交換を行いました。検討会は令和7年度まで実施する予定です。

将来像の実現に
向けた会議が
いよいよ
キックオフ！

2024

2023年12月

下丸子まちづくり座談会

下丸子のまちづくりを考えるきっかけづくりの一環として、2023年12月16日(土)に公開座談会を開催。三部で構成され、第一部ではさまざまな分野で活躍するゲストスピーカーによる地区内外のまちづくり事例を紹介。第二部では野原卓さんがおたクリクリエイティブタウンセンターのこれまでの取り組み等を紹介し、第三部ではゲストスピーカーと野原さん5名による座談会を行いました(P.4参照)。

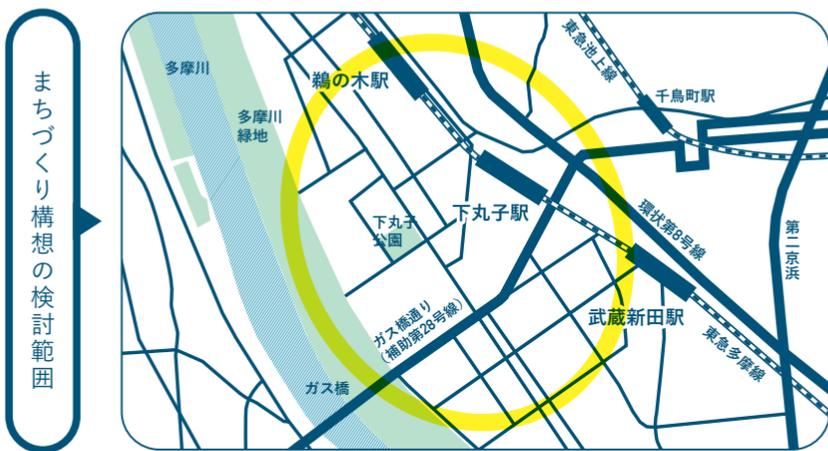
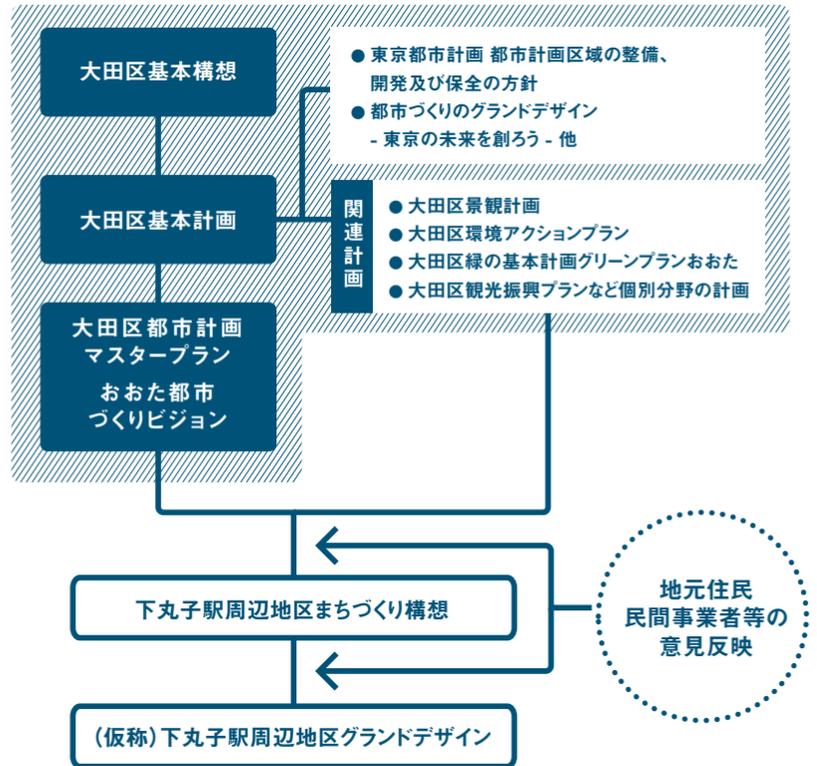
2040年に向けたまちづくりが進行中！

『下丸子駅周辺地区まちづくり構想』とは？

「下丸子駅周辺地区まちづくり構想」は、概ね20年後(2040年)の将来像とその実現に向けたまちづくりの方針を、上位関連計画や地区の関係者との意見交換等を踏まえとりまとめたものであり、地区の関係者と共有しながらまちづくりを推進するための指針となるものです。

今後、地元(住民や企業)や鉄道事業者などの関係者にまちづくり検討会等を通じて意見をうかがいながら、まちづくりコンセプトの実現に向けた、より具体的な取り組みを位置付ける「(仮称)下丸子駅周辺地区グランドデザイン」の策定を行います。

[まちづくり構想の位置付け]



まちづくりコンセプトと 目指すまちの姿

空港につながり、職・住・憩い・にぎわいが集まるまち ～新たな価値を生み出すまち・クリエイティブタウン～

上位計画の「大田区都市計画マスタープラン」における当地区が求められる役割、また、地区の強み・弱み、社会動向など、勉強会で出た意見等を踏まえ、下丸子駅周辺地区の「まちづくりコンセプト」を設定しました。さらに、実現に向けた取り組みの方針として、4つの「目指すまちの姿」を定めています。

1 居心地が良く歩きたくなる ウォークブルなまち

- ① 居心地が良く歩きたくなる街路空間
- ② 鉄道南北を超えたまち全体の一体性向上
- ③ 自由な移動を支える柔軟性のある移動ネットワークの形成
- ④ 豊かな活動の場としての公共空間創出
- ⑤ 地域資源や地域らしさを活かした場づくり



(上)モビリティ・ハブのイメージ (出典)国土交通省(下)駅前の広場空間のイメージ

2 多様な交流からイノベーションや 産業がはぐくまれるまち

- ① 交流から生まれる新たな創造・技術を生み出す場の創出
- ② 多様な交流の場の創出
- ③ 魅力のある商店街づくり
- ④ チャレンジの場と受け皿の設置による産業の活性化
- ⑤ 豊かなくらしと産業をはぐくむ活動の創出と発信



(上)チャレンジの場のイメージ (下)個性や魅力のある商店街のイメージ

3 豊かなくらしを実現する 活動・場が充実したまち

- ① 地域のくらしを支えるサービスの充実
- ② 地域の交流拠点や交流の場の創出
- ③ 自然・歴史・文化等の地域資源を活かした景観づくり
- ④ 災害時に対応する安全・安心のまちづくり



(上)やすらぎと個性のある空間のイメージ(下)駅前広場と一体的な交流拠点のイメージ

4 地域・企業とともにつくり・つかう 「共創」のまち

- ① エリアプラットフォームの形成による様々な主体が集う機会の創出
- ② 実証実験・検証を通じた魅力的な場や活動の実現
- ③ 幅広い情報発信による新たな理解者・ファンなどの創出



エリアプラットフォームの取り組みイメージ

